

2024年度 中京大学チャレンジ奨励金 最終報告書

2025年 2月 14日

学部・学年 文学部 日本文学科

氏名 加藤桃花

1. プロジェクト名

中京大学アクティブ・ラーニング〈キャラバン〉2

—学びの楽しさをより深く・より広く—

2. 活動期間

2024年 6月 3日 ～ 2025年 1月 31日

3. 主な活動場所

愛知県立津島高等学校、文化のみち二葉館、JICA横浜海外移住資料館、
岐阜県立山県高等学校、中京大学

4. 参加者 13 名（「7. 参加者名簿」に参加者氏名等を入力してください）

5. 予算・使用経費等（足りない場合は各自で列を足してください）

費目	品名・内容	予算金額	執行金額
例) 消耗品費	文房具、教科書、材料費	100,000 円	85,000 円
印刷製本費	活動周知のためのチラシ作成費	30,000 円	29,700 円
支払い報酬手数料	謝金、活動報告書作成費	240,000 円	258,341 円
消耗品費	文房具、材料費	35,585 円	17,651 円
通信運搬費	報告書・チラシ郵送費	30,000 円	9,978 円
旅費交通費	交通費	250,172 円	217,840 円
合計		597,117 円	533,510 円

6. プロジェクトの活動報告

◆プロジェクトにおける活動内容と目標
<活動内容> 文化施設等でのイベント開催、高等学校でのアクティブ・ラーニングを用いた授業実践 <目標> 活動を通して、アクティブ・ラーニングの意義や活用について研究すると共に、広い範囲でアクティブ・ラーニングの手法を広める。 郷土愛知出身の作家の理解を深めたり、海外日系人との交流を行ったりすることで国語科の新たな魅力を発見する。
◆中間報告時に抱えていた課題への対応結果
<中間報告時に抱えていた課題> ●津島高等学校での授業実践について 課題：授業実践の内容について、問題点が次々と出てくる。 ●文化のみち二葉館での朗読イベントについて 課題①：明和高校の生徒がイベントに参加できるかが確定しておらず、イベントの詳細が決定できない。 課題②：イベントの参加申し込みについて、申し込みができていないかが分からない、という声が挙がっている。 <対応結果> ●津島高等学校での授業実践について 模擬授業を何度も行い、その都度問題点を改善していった。 あらゆる状況を想定しておくことにより、実際の授業実践でも対応することができた。 ●文化のみち二葉館での朗読イベントについて ①に対する対応結果：明和高校の生徒がイベントに参加できた場合とそうでない場合を予め決定しておき、柔軟に対応する。 最終的に、直前で明和高校の生徒が参加してくださることになったのだが、事前に計画を立てていたため、本番でも問題なくイベントを進行することができた。 ②に対する対応結果：申し込み確認メールを自動で送信する設定を行い、申し込みをしてくださった参加者の方がスムーズに申し込みを確認することができた。

◆プロジェクトの目標達成状況（活動内容等を具体的に記入してください）

<達成状況>

自己評価による達成度： 92%

1. 愛知県立津島高等学校での AL 実践

高校2年生の文系クラスで、科目は「文学国語」とし、教材は津島高校の出身である稲葉真弓の『唇に小さな春を』を採択しました。全2時間の単元として構成し、1時間目を浅利先生が、2時間目をアクティブ・ラーニング研究会所属学生が担当しました。

1時間目では浅利先生による、プリントを使用した作品の内容を理解するための授業を行っていただきました。その際、2時間目につなげる問題として、ホットシーティングで質問することを考える時間も設定していただきました。2時間目ではAL研所属学生が1時間目の読解を踏まえた上で、「ドラマ技法」と呼ばれる手法の一つであるホットシーティングの活動を通して、登場人物である「僕」の心情を考える活動を行いました。ホットシーティングとは、生徒が登場人物になりきり演じることで心情を深く理解することを目的としたアクティブ・ラーニングの手法です。従来のホットシーティングでは、前に出た1人の生徒が役を演じ、他の生徒が質問をする方法をとるのですが、今回は全ての生徒に登場人物を演じることを体験してもらうために、ペアでの活動としました。演じる登場人物は主人公である「僕」とし、「僕」役と、質問者兼ワークシート記録者の役割を交代して行い、合計2回のホットシーティングをする活動を設定しました。ホットシーティングを活動に取り入れることで、生徒は活動前よりも「僕」の心情をより深く読み取ることができていました。

2. 講演と朗読のつどい—永瀬清子と愛知県第一高等女学校高等科—

文化のみち二葉館で、愛知県にゆかりのある永瀬清子にまつわるイベントを行いました。イベントは第一部と第二部に分け、第一部は岡山市赤磐市からお越しいただいた白根直子さんによる講演「永瀬清子と愛知県第一高等女学校高等科のころ」が行われ、永瀬清子さんの生い立ちや経歴などをお話いただきました。第二部ではアクティブ・ラーニング研究会と明和高校の学生による「春になればと同じに」の朗読と、朗読家の石田麻利子先生による「あけがたにくる人よ」の模範朗読が行われました。最後には、本研究会顧問の小塩先生、石田先生、白根さんによる、このイベントを振り返る鼎談が行われました。

イベントの参加についてはチラシを作成し各地に配布すると共に、ALBOでも告知を行いました。

3. 横浜短歌合戦 in 海外移住資料館

JICA横浜、公益財団法人 海外日系人協会、一般社団法人 海外日系新聞放送協会、横浜歌人会より後援をいただき、3人1チームによる「短歌合戦」形式の短歌を詠み味わ

うイベントを行いました。海外移住百人一首や、事前に応募して選定した短歌の中から自分の「推し」短歌を選び、チーム内で短歌の魅力を語り合いました。自分の推しポイントを全体で発表し、判定員にどのチームが一番短歌の魅力を伝えられているかを判定していただきました。

事前公募についてはALBOで告知を行い、中京大学生にも短歌の応募を呼びかけました。海外移住・国内外に関わる短歌の募集も行い、イベント終盤には短歌の入賞者への表彰式も行いました。

4. 岐阜県立山県高等学校での授業実践

出前授業と題し、要請を受けて山県高校での授業実践を行いました。山県高校の学校設定科目である「キャリアデザイン国語」という選択科目で授業を行いました。教材は昔話の『かちかち山』を採択し、一時間完結の授業を構成しました。活動の主な内容としては、アクティブ・ラーニングの手法であるジグソー法を用いた班同士の交流を行いました。ジグソー法とは、「ホームグループ」→「エキスパート活動」→「ジグソー活動」という3つのステップにそって、生徒が班員や他の班員との交流を行うことで、他者に伝える力や、思考力、判断力、表現力を身につけるものです。今回はジグソー法を活用することで、生徒同士の交流を図る他、多様な意見を知るきっかけを作ることをねらいとしました。

5. 学内での授業実践

文化のみち二葉館でのイベントにおける活動実績を基に、作家であり詩人宮沢賢治の作品である「心象スケッチ 春と修羅」を用いた授業実践を行いました。授業実践後は授業に対する感想や改善点を、参加者の方々と共有する活動も行いました。

この授業実践は中京大学で行い、公開模擬授業と題して参加をALBOで促しました。当日は、教職志望者や詩に興味関心を持った学生5名に参加していただきました。

◆改善点、やり残したこと

本プロジェクト全体を通して言えることですが、活動の準備を始めるのが遅かったと感じています。例として、イベントでは参加の呼びかけをもっと早く行っていたらより多くの方に参加いただけたかもしれないですし、授業実践においては授業構想などを早い段階で決めておけば、その後の模擬授業もより多く行い、その分改善点を修正できたと考えられます。

また、各活動を行うに当たっては、活動に関わってくださった先生方や施設の方との連絡を行い、活動内容等を決定していききました。活動に関わってくださる方々は普段の業務に加え、貴重な時間を割いて私たち学生の為に尽力してくださっていたのですが、活動直前に何度もご連絡をしまい、ご迷惑をおかけしてしまいました。余裕を持って活動の準備を進めておけば、ご迷惑をおかけすることもなかったため、今後は早い段階から先方

の方と連絡をとり、常に万全の状態で活動を進められるようにしたいです。そして、私たちが活動できているのは多くの方々の支えがあってこそそのことであり、今活動が出来ていることを当たり前だと思わず、感謝の意を常に持ちながら活動することが重要であると感じました。

◆今回のプロジェクトを実施したことにより、どのような気づきを得たか

今回のプロジェクト全体を通して、学びの多様性を改めて感じました。今回行った5つの活動は、2つの高等学校と授業実践を含む3つのイベントを行い、文化のみち二葉館でのイベントと学内の授業実践においては関連した内容だったのですが、教材や手法は異なっていたため、実施してみるとそれぞれに違った学びを実感することができました。それは、教材や対象が異なれば、そこから得られる学びも異なるからだと感じました。そのため、同じ国語科の教材であっても、すべての授業で一方向的に教授するのではなく、教材や学びの対象によって使用する手法を変えることが、学び手の深い学びに繋がるのではないかと感じました。

また、今回のプロジェクトでは、参加者の活動への主体的な参加が行われたため、多様な意見を知ることができ、私たちも新たな知見を得ることができました。そのため、活発に意見を交流することで相互的に学びが深まるということも気付くことができました。

◆今後チャレンジしていきたいこと

(例えば、成果の活用・利用について、次回のプロジェクト活動に向けての抱負、卒業してからの展望等、自由に記入してください)

前述したとおり、教材や学びの対象によって使用する手法を変えることが必要であることが、今回のプロジェクトを通して気付くことができたため、今後はより一層アクティブ・ラーニングの手法や活用例について研究し、教材や対象と関連付けながら効果的にアクティブ・ラーニングを授業の中に取り入れていきたいです。加えて、アクティブ・ラーニングを批判的に捉えることも大切だと感じています。「アクティブ・ラーニングを取り入れているから生徒は深い学びができるだろう」と考えるのではなく、「アクティブ・ラーニングを取り入れることで、生徒にどのような効果があり、どのような学びが期待されるのか」を追求することが、本当の意味で生徒の「主体的・対話的で深い学び」に繋がると考えています。

今回プロジェクトに参加したメンバーは、将来国語科の教員として社会で活躍することを目指しています。今回のプロジェクトで学んだことは、今後私たちが教員として働く上で、間違いなく大きな糧となると考えています。今回の経験を、教壇に立った際に生かすことができるよう、今後も活動に励んでいきたいです。

そして、今回の活動については活動報告集として冊子にまとめているため、機会があれば今後関わらせていただく先生方や施設の方々、また興味のある学生等にも配布できればと考えています。

◆実施結果（成果）

※必要に応じて写真・現物添付可。枠欄が足りなければ、追加してご記入ください。



愛知県立津島高等学校での授業実践におけるホットシーティングの様子



文化のみち二葉館でのイベントにおける朗読実践の様子

- ・ 中京大学学生広報スタッフ『ライト』の方々に取材していただいた記事
「アクティブ・ラーニング研究会、2024 年度チャレンジ奨励金プロジェクトに再挑戦」
URL : <https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2024/08/024182.html>
- 「講演と朗読のつどい「永瀬清子と愛知県第一高等学校高等科」」
URL : <https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2024/11/024443.html>



7. 参加者名簿（足りない場合は各自で列を足してください）

番号	学籍番号	学年	氏名	備考
----	------	----	----	----